

ボート

競技歴浅い代表陣 伸びしろに期待十分

国内の強化指定・育成指定選手は、ほとんどが東京都の選手発掘事業などでボートと出合った他競技からの転向組。PR3の西岡利弘（ヒロタニ、琵琶湖RC）以外は、競技歴も1〜4年ほどと浅い。

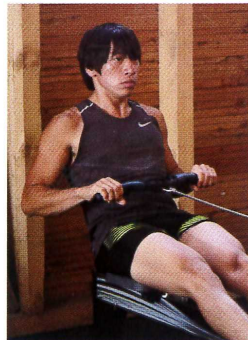
PR1男子の遠藤隆行（川越市役所、湖猿）はパラアイスホッケーの銀メダリスト。パラリンピックで最も活躍した選手に贈られるファン・ヨンデ功績賞を日本人で初めて獲得したレジェンドだ。2017年にボートに転向し、ホッケーで鍛えたバランス感覚や体重移動を武器に世界と戦う。



遠藤隆行(42)

PR1女子の市川友美（三菱UFJビジネスパートナー、湖猿）はボート歴4年。174センチの長身を生かしたオールさばきでパラリンピック出場を狙う。

PR3舵手つきフォアは、視覚障害の有安諒平（東急イーライフデザイン、湖猿）と日向舞香（アクサ生命保険、湖猿）、右半身まひの八尾陽夏（三井物産ビジネスパートナーズ、戸田中央総合病院RC）、



有安諒平(33)

左ひじ下まひの西岡が有望選手。視覚障害者柔道から転向して4年目の有安が軸となっていリズムを作り出す。コックスは一般のアジア選手権で銀メダルを取ったこともある実力者、立田寛之（大広、戸田中央総合病院RC）が務める。このメンバーでチームを組んで3〜4カ月で出場した昨年の世界選手権では14位に入った。大戸淳之介ヘッドコーチは「このメンバーは、揃ってしっかりとリズムを作るのがうまい。あとはフィジカルを強化し、世界との差を埋めていく」と伸びしろに期待している。

文 編集部 深澤友紀



立田寛之(28)

安全確保のため 1人乗りには「浮き」

シングルスカルは比較的障害が重く、体幹も利かない選手が乗るため、ボートの両脇に「ポンツーン」と呼ばれる浮きを取り付け、安全を確保する。左右に傾くと水の抵抗を受けてしまうため、ぶれずに漕ぐ技術が必要だ。



唯一進行方向を向く 司令塔「コックス」

舵手つきフォアには4人の漕ぎ手と、進行方向を向き舵取りを担う舵手（コックス）が乗る。選手がリズムよく漕げるように声をかけ、風向きを読んで進行方向を指示し、スパートのタイミングも計る司令塔。健常者が務めてもOK。

スタートはスタッフが手で固定

スタートの時には大会スタッフが艇尾を手で持ち、船首を機械で固定し、信号ランプとブザー音による合図で一斉に出発する。フライングを2回すると失格。ブイで仕切られた直線コースの別のレーンに入っても失格になる。



photo エックスワン(ダブルスカルのスタート)

競技中、常には後ろ向きに進む唯一の競技がボートだ。パラローイングとも呼ばれ、2008年の北京大会からパラリンピックの正式競技になっている。パラリンピックでは、体幹が利かず、自力歩行できない選手が対象のPR1シングルスカルの男子と女子、体幹は利くが下肢に障害がある選手が男女1人ずつ乗るPR2ダブルスカル、そして肢体不自由の選手と視覚障害の選手を男女2人ずつ組み合わせた4人と舵手が乗るPR3舵手つきフォアが行われる。

ルールは基本的には健常者のボート競技と同じで、スタートの合図で同時にボートを漕ぎ出し、ボートの先端がフィニッシュラインを通過した順に順位が決まる。リオ大会までは1千メートルだった距離も、東京大会ではオリンピックと同じ2千メートルで競う。

一方、競技艇は異なる。健常者はシートが前後にスライドし、足を屈伸させて主に脚力を使って漕ぐのに対し、PR1とPR2の競技艇は固定シートで、上半身の力だけで2千メートルを漕ぎ切る。その力強いオールさばきに圧倒される。男子シングルスカルは2千メートルで約400回漕ぐ。同じ動作を繰り返すため1回の漕ぎで10センチ違えば40メートルの差。ひと漕ぎたりとも気が抜けない。

舵手つきフォアは肢体不自由者と視覚障害者、健常者が男女混合で一つの艇に乗る多様性を体現した種目。障害も性別も異なるメンバーが協調し、最高のパフォーマンスを発揮する姿に注目だ。

photo 日本ボート協会(2019アジア選手権。77ページの遠藤選手、有安選手、立田選手、シングルスカルも)